

七夕の由来・松江市美保関町万原

令和2年12月1日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{ただよし}

イラスト・福本 隆男



語り手 梅木芳子さん（明治37年生まれ）
収録・昭和45年7月26日

あらすじ

昔、炭焼きおやじが炭を焼いていたら、きれいなお姫さんが天の羽衣を脱いで水浴びするのを見つけ、その羽衣がほしくなり、羽衣を盗んで家へ帰ったげな。

お姫さんは水浴びが終わって羽衣を着ようと思われなければいけないので、仕方なく炭焼きおやじの嫁になった。三年も経つと赤ちゃんが生まれたのでテツパチと名をつけたげな。

テツパチが羽衣を見つけたので、お姫さんはテツパチをつけて天に帰ったが炭焼きおやじも朴の木を植え、それにつかまって天に昇り、姫とテツパチを訪ねる。お姫さんはおやじに、「舅さんがどげな難しいことを言わつしやっても『やだ』と言わぬように」と教えておく。

翌朝、舅は「同ころの粟畑に八斗の種を蒔くよう」と言いつける。後からお姫さんが弁当を持ってきて、すぐ八斗の

粟を八反の畑に蒔いて帰って行つたげな。

また次の日、「昨日蒔かした種を一粒残らず八斗の枡に拾つてもどうだや」

昼になると、またお姫さん来て、カンチクヨウチヨウの笛という笛を吹かれたら、何千羽という鳥がどこからともなく飛んで来て、八斗の粟の種を拾って取りまとめたのでそれを袋に入れて負って帰つたげな。

次の日。「家の下の川を渡つた向こうに植えてある瓜や西瓜の草を取つてこつさい」

お姫さんは「なんぼ瓜や西瓜が成つちよつても、一つだし食うなよ」と言つておかれたけれど、あまりりつぱに熟れているので、「一つぐらいむしつて食つても分かせんわい」と思つて、味瓜を一つ、爪でプツンとむしつて食べたら、食べるか食べないうちに大水になつてしまひ、後からお姫さんが弁当を持って来られたものの、川が渡られなくなつたので、「おまえさんが

瓜食わつしやつたけん、もう逢われんがね、しかたがなね」と言つたら、「川の音がし

て聞こえんがなあ。七月七日に逢わぞやあ」と、おやじさんが答えたげな。それで七夕さんは一年に一ぺん、七月七日にしか逢うことができぬようになったのだけな。

解説

昔話の名前では「天人女房」として知られている。

この物語は有名で、室町時代前期に活躍した世阿彌（1363～1443）の作品である謡曲「羽衣」としても古くから知られており、日本人にとつて懐かしい話である。ただ、この謡曲の方は昔話の前半部分が独立した形で作品化されている。簡単に述べておくと、三保の松原で漁夫白龍が天人の羽衣を取るが、天人の嘆きを見てやがてその衣を返す。天人は喜んで舞を舞い天に上つて行くのである。したがって、「一人の結婚云々」以下の物語はない。全国各地には類話が多い。指摘するだけにとどめておく。

（元島根大学法文学部教授）



https://kanbenosato.com/minwa/kanchou_200707.html